

きずな

2013年
(平成25年)

9



ささえあって、生き生きと

特集テーマ

高齢者



9月第3月曜

敬老の日

1947(昭和22)年に多可郡野間谷村(現多可町八千代区)の村長と助役が提唱した「としよりの日」が始まりで、1964(昭和39)年に「老人の日」と改称され、翌年に国民の祝日「敬老の日」となりました。2003(平成15)年に9月15日から9月第3月曜になりました。

2 仲間と共に歌うことが
私たちの生きがい
氷上寿学級コーラスクラブ(丹波市)

3 支え、支えられる高齢者
浦 光博さん
(広島大学大学院総合科学研究科教授)

4 お弁当を届けて高齢者を見守る
NPOひまわり会(明石市)

5 介護者たちがリフレッシュできる場に
NPO法人つどい場さくらちゃん(西宮市)

6 神戸から世界へ
～Age Friendly Cityの実現に向けて～
水上 然さん(神戸学院大学総合リハビリテーション学部講師)

7 ホームレス問題の現状と支援のあり方
水内俊雄さん(大阪市立大学都市研究プラザ教授)

8 情報ぶらざ



高齢者

日本の高齢化は著しく、4人に1人が65歳以上という社会が訪れようとしています。元気に活躍している人がいる一方、介護される高齢者や介護者の社会的な孤立をはじめ、虐待、高齢者を狙った犯罪などの人権課題も増えています。今月は高齢者が生き生きと暮らし、世代を超えて支え合う社会について考えてみましょう。

仲間と共に歌うことが私たちの生きがい

氷上寿学級コーラスクラブ（丹波市）

丹波市氷上町の地域高齢者学級「氷上寿学級」は、18ある趣味講座の受講生が運営する自主サークルです。その一つ、コーラスクラブは市の文化祭や合唱祭、ふれあいサロンなどでの発表を目標に月2回、氷上住民センターで練習しています。

「みなさんは素直で、教わったことをすぐに吸収し上達が早いです」と指導者の佐藤頼子さんは話します。メンバー32人の平均年齢は77歳。豊かな人生経験が情感あふれる歌につながっているとい

います。
練習の最初に歌うのは「氷上寿学級賛歌」。寿学級に対する思いが込められた歌詞はメンバー全員のお気に入りです。「大きな声で歌うことは楽しいし、健康にもいい。何よりも友達



8月の「ひょうごヒューマンフェスティバル2013 in たんば」に出演。「花ぞして母」「ローレライ」「花」の3曲を歌いました



練習の様子。指導者の佐藤さん（左端）は元中学校の音楽教師です

健康づくりや生きがいづくりとして、メンバーの家族もコーラス活動に好意的といえます。「メンバーの中には家族に送迎してもらっている人も多いです。私たちがコーラスを楽しめるのも家族の支えがあるから。感謝しないといけませんね」

氷上寿学級賛歌

- 1 着いたついたよ公民館に
がんばりましょうよみんなのクラブ
あの人この人目でさがし
親しい友とのむつみあい
寿学級 我らの氷上 我が氷上
- 2 胸の名札ではじめて知った
君の名前をふと口ずさむ
合同学習 足どりも
軽く行きますどこまでも
寿学級 我らの広場 我が広場
- 3 合うたび笑顔でかがやく瞳
今日もしあわせみんなの仲間
共に行こうよ学ぼうよ
生きる喜び分かち合う
寿学級 我らのつどい 我がつどい

支え、支えられる高齢者

浦 光博さん（広島大学大学院総合科学研究科教授）

社会が作り出す弱者

人は誰でも何らかの弱さを持っています。しかし個人としての弱さが社会によって補われるならば、それは「社会的な」弱さにはなりません。たとえば高齢者はみな「老い」という特徴を持っています。この「老い」は時として弱さとなるでしょう。しかし、相互扶助の風土があり、人びとが互いに支え合うことが当たり前である社会の中では、個人として弱さを持つ者であつても社会的弱者にはならず済むのです。

しかし、近年の日本社会は「無縁社会」と表現されることもあるように、家庭や地域の相互扶助の風土が希薄化しているといわれています。国際比較の結果（OECD、2006年）を見ても、先進諸国の中で日本社会における地域内での相互扶助の水準は決して高くはありません。友人や同僚、種々のグループや家族との付き合いの頻度やボランティア団体への参加の程度が、他の先進諸国と比較するとかなり低い水準にとどまっているのです。日本社会の中で孤立を深めている人が少なくないのです。

このような社会的な孤立は人の心身に少なからぬダメージを与えます。特に高齢者への影響が大きいことが指摘されています。たとえ

ば、高齢者が社会的に孤立するほど、心臓疾患の罹患リスクが高まることを明らかにした研究があります。また、孤立が抑うつを高めることも多くの研究で確認されています。当然、孤立した人は周囲の人びとからサポートを受ける機会も減少します。その結果、心身の健康の悪化が時として深刻な問題につながることもあります。たとえば孤独死です。新聞報道によれば、2009年に全国98の自治体が運営する公営団地で孤独死した人の数は少なくとも1191人に上るということです（毎日新聞2010年10月27日東京朝刊）。

高齢者が社会を支えるシステムの構築を

このような社会環境の中で、高齢者が生き生きと暮らせるようにするためには、支え合いのシステムの構築が必要です。ただし、そのようなシステム作りにおいて留意すべき点があります。それは、支えられるだけの立場にあることによって、人はかえって心身の健康を損ないがちであるということです。特に高齢者にその傾向が顕著であることが、多くの研究で指摘されています。自分は他者からの支えなしには独り

立ちできない無力な存在なのだと感じることにによって自己肯定感が損なわれます。それが精神的な健康を悪化させるだけでなく、ストレスへの耐性を低めて身体的な健康にもダメージを与えるのです。

近年では元気に活躍する高齢者が少なくありません。そもそも、高齢者は長い人生経験で蓄積してきた知識や知恵、技術など多くの資源を持っています。それらの知識や知恵、技術を使って、高齢者が他者をそして社会を支える仕組みを作ることが重要です。そのような仕組み作りは、すでに始まっています。地域における子どもの見守りや子育て支援、防犯や防災のためのボランティア活動、さらには地域の文化や伝統を伝える活動などでは、高齢者が主役となつて組織的な活動が行われています。

しかし、そのような活動を続ける高齢者の割合はまだ割合に満たず、活動の場も限られており（平成24年度高齢社会白書）、また、高齢者自身も自分の能力をどこでどのように生かせるのかを十分には理解できていません。そのため、多様な能力が十分に生かされているとは言えません。地方自治体や公的機関が積極的に情報提供し活動のきっかけ作りを行うなどによって、高齢者の活動の場を広げることが求められます。



プロフィール 1956（昭和31）年、大阪府生まれ。1984（昭和59）年、関西大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。博士（社会学）。鳴門教育大学助教授を経て1994（平成6）年、広島大学に着任。2006（平成18）年から現職。日本グループ・ダイナミクス学会理事、会長を歴任。今年から日本社会心理学会常任理事を務める。著書に「排斥と受容の行動科学—社会と心が作り出す孤立」（サイエンス社）など。



お弁当を届けて高齢者を見守る NPO ひまわり会（明石市）

神戸市と明石市にまたがる明舞団地は昭和39（1964）年から入居が始まり、現在は住民の高齢化が進んでいます。「NPO ひまわり会」は明舞団地を中心に、高齢者宅へのお弁当の宅配を通じた見守り活動に取り組んでいます。

同会は2003（平成15）年に発足、メンバー38人は全員がボランティアです。代表の入江一恵さんは元兵庫女子短期大学（現兵庫大学）教授。「社会福祉の基本は個人を大切にすることにある」という考えの下、お弁当を作っています。「お米の硬さは利用者の好みに応じて三種類に炊き分けます。一人ひとりの要望にきめ細やかに対応するよう心掛け

ています」

宅配は月曜、火曜、木曜、金曜の昼食と夕食。110人いる利用者の一人ひとりに手渡しし、体調に異変はないか、生活で困ったことがないかを確認します。利用者の女性は「お弁当は家庭的な味付けで、健康にも配慮してくれています。スタッフの方の気遣いがうれしいです」と話します。

「配食サービスは決して楽ではありませんが、利用者に手を握られ感謝されると、明日も頑張ろうという気持ちになります。今はボランティアの善意に支えられている状況なので、組織としての体制を固めたいです」と長期的な活動を視野に入れています。



お弁当を届け、言葉を交わすことで利用者に変わりがないかを確かめます

県の明舞団地再生の取り組み

兵庫県では団地居住者はじめ、明舞団地に関係しているNPOや住宅管理者等の協力の下、同団地の活性化に取り組んでいます。居住者、関係者がまちづくりなどに関する情報を共有することを目的にホームページを開設しています。

詳しくは [明舞団地のまちづくり](#)

検索

NPO ひまわり会と明舞団地

2003（平成15）年にNPO ひまわり会が活動を開始したのを皮切りに、明舞団地には数々の住民団体が発足。ごみ出しや庭の手入れなど生活のちょっとしたお手伝いをする「お助け隊」、ふれあい喫茶「陽だまり」などが活動しています。また、学生も参加し、住民団体と協力して数多くのイベントを開催しています。

詳しくは [明舞まちづくり広場](#)

検索

取材ノート
から

介護者たちがリフレッシュできる場に NPO法人つどい場さくらちゃん（西宮市）

丸尾さんはキッチンから和気あいあいの様子を見守ります。「介護の悩みに関する電話もよくかかってきます。介護者は誰しも

で話題が尽きることはありません。



昼食を食べながら会話を楽しむ介護者たち。つどい場の利用料は500円、昼食は別途500円

就きます。いっぱい話して、いっぱい笑ったからか、どの顔も表情はすっきり。つかの間の息抜きを楽しんだ介護者たちを、丸尾さんは笑顔で見送ります。

夕暮れ時、お開きとなり、三々五々帰路に

さくらちゃんでは「つどい場」のほかに、「3つのタイ」に取り組んでいます。

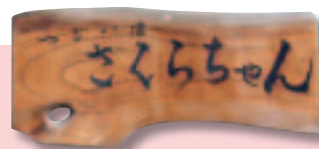
- **おでかけタイ**… 要介護者、介護者が参加できる旅行ツアーを催行します
- **学びタイ**…… 専門家を招いて介護技術や介護制度、医療に関する講習会を開きます
- **見守りタイ**…… 認知症など見守りが必要な高齢者を介護している人がリフレッシュできるよう、代わりに見守ります

問 つどい場さくらちゃん TEL 0798 (35) 0251

つどい場さくらちゃん

検索

代表の丸尾さん。利用者たちからは親しみを込めて「まるちゃん」と呼ばれています





先日、韓国のソウルで開かれた国際老年学会（IAGG）に参加しました。学会には、世界各国から医学、社会学、経済学など多様な背景を持つ4000人を超える研究者が参加し、「老年学」に関する課題が議論されました。現在、先進国だけでなく、発展途上国でも高齢化が進んでおり、健康、介護、社会保障など多くの領域で対策が急がれています。

日本の高齢化は2050年にピークをむかえ、10人に4人が65歳以上の社会になる見込みです。日本は、高齢化の割合の高さ、その速さ共に世界の先頭を走っており、今後どのように歩ん

世界から注目される日本の高齢化

神戸から世界へ

～Age Friendly Cityの実現に向けて～

みずかみ つづる
水上 然さん

(神戸学院大学
総合リハビリテーション学部
講師)



でいくのか全世界から注目されています。社会システムを整え、高齢者が安心して、生きがいを持って過ごすことのできる社会を日本が構築することができれば、長寿社会のすばらしさを証明でき、全人類に「希望」を与えることができるでしょう。日本の役割は極めて重要になっています。

高齢者の権利擁護

IAGGでは、高齢者の権利擁護についても多くの議論が行われました。虚弱な高齢者が暴力や虐待の被害を多く受けており、その防止に向けた取り組みの重要性が指摘されました。国連において高齢者の権利擁護に向けた条約を締結すべきだと提案され、IAGGから国際社会に対し、高齢者の権利の擁護に向けて発信していくこととされました。

日本における高齢者虐待の現状ですが、2011年度（厚労省報告）に市町村等に相談通報され高齢者虐待だと判断されたケースは、養護者による虐待が1万6599件、養介護施設従事者によるものが1511件でした。未婚の息子からの虐待、夫婦二人世帯での夫からのものが多くなっています。両者に共通する背景として、社会的な孤立がキーワードとなっています。IAGGの多くの研究は、地域社会との結びつきを強め、社会的な支援を届けることで、虐待を未然に防止し、虐待の深刻化を防ぐことができることを述べ

ています。高齢者の権利を擁護できる地域づくりが重要です。

神戸から世界へ

現在、世界保健機関（WHO）では神戸センターを中心に世界各都市で「Age Friendly City（高齢者にやさしい都市づくり）」のプロジェクトを進めており、IAGGのメインシンポジウムで、その取り組みが紹介されました。高齢者にやさしい都市として、構造物をバリアフリー化し、さまざまな施策を展開し、高齢者の尊厳が真に守られているのかということ、プロジェクトにおいて開発した指標を基に評価し、達成できている場合には「Age Friendly City」であることを宣言します。神戸から世界に向けて、高齢者の権利擁護に向けた取り組みが発信されています。

高齢者にやさしい都市づくりの取り組みには自治体の参加が不可欠ですが、それだけで成しうるものではありません。そこに暮らす私たち一人一人が、地域のつながりを大切に、「Age Friendly City」に向けた取り組みを実践することによって、はじめて実現可能となるでしょう。

.....

プロフィール 大阪府出身。社会福祉学博士。大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程修了。大阪市立介護老人保健施設おとしよりすこやかセンターの支援相談員などを経て、2011（平成23）年から現職。主に高齢者福祉（権利擁護、虐待の防止、認知症高齢者への支援、分野の研究に取り組んでいる）。

じんけんガイド もの忘れコールセンターのご案内

県では、認知症が気になる人やその家族向けに、短縮ダイヤルでつながる相談窓口を設置しています。看護師等が対応し、地域の相談機関や医療機関を紹介します。



なぜ なぜ
#7070
(なぜなぜダイヤル)

なに なに
#7272
(なになにダイヤル)

受付時間／平日 10:00 ～ 12:00
13:00 ～ 16:00
(祝休日、年始年末を除く)

※通話料がかかります。
どちらの番号も案内内容は同じです。
携帯電話、IP 電話からはつながりません



この人に
聞く!

ホームレス問題の現状と支援のあり方

水内 みずうち 俊雄 としお さん（大阪市立大学都市研究プラザ教授）

大阪市立大学都市研究プラザ教授の水内俊雄さんは長年にわたり、フィールドワークを織り交ぜての「脱ホームレス支援」に取り組んでいます。さらに、昨年は厚生労働省「ホームレスの実態に関する全国調査」の検討委員も務めました。



Q ホームレスとはどのような人々のことをいうのでしょうか。

A 一般的には、路上で生活する人のことをいいます。2012（平成24）年度の厚生労働省の調査によると、路上生活者は全国で9576人います。2008（平成20）年度より半数近く減少していますが、最近ではさまざまな生活のスタイルが存在します。例えば、ネットカフェで寝泊まりするといった不安定な居住状態にある人や、居所のない生活困窮者も含めて広義にホームレスと捉えると、全国で4万人以上に上ります。

Q 水内さんのホームレス支援の考え方は。

A 第一に居住支援が大切だと考えています。国のホームレス対策の予算でも「緊急一次宿泊事業」として計上され、短期・中期の住居提供が進んでいます。もちろん、住居を用意するだけでなくその後も寄り添って自立支援をしていくことが不可欠です。

次のステップとしては就労支援が重要になります。障害者福祉の方面では具体化され先行していますが、ホームレス支援においても就労自立に向けた取り組みが必要です。ホームレス自立支援法の目的は、就労を基に

して脱ホームレスした人たちに地域生活を再スタートする支援を行うことにあります。私はこのような観点で支援団体やホームレス経験者への聞き取り調査などを行いながら、脱ホームレス支援を行っています。

Q せっかくホームレス生活から脱却し新しい生活を始めても、社会になじめずに孤立してしまう人が多いと聞きます。

A 地域に引越してきて就労したり、生活保護を受けながら生活を送っているホームレス経験者とのコミュニケーションをわれわれは避けてしまいがちです。しかし、直接でなくても支援者や大家さん、不動産業者などと協力して、その人が暮らしやすい環境をつくるのが大切です。最終的には、このような取り組みが地域の結び付きを強くし、生活困窮者の落ち着いた生活の回復や無縁社会の解消へとつながっていくものと考えています。

プロフィール 1956（昭和31）年、和歌山県生まれ。京都大学理学部、同大学文学部卒業。富山大学助教授、大阪市立大学大学院教授などを経て、2006（平成18）年から現職。大阪市立大学では大学院文学研究科教授も兼任。大阪府社会福祉協議会理事、NPO法人ホームレス支援全国ネットワーク理事、「ホームレスと社会」編集長なども務める。著書に「創造都市と社会包摂文化多様性・市民知・まちづくり（文化とまちづくり叢書）」（水曜社）など。

きんぐふりーファミリー
おすすめの一冊



75年目のラブレター

貴島テル子著（朝日新聞出版）

本書は、夫の死を乗り越え、33歳で小児科医になった著者から、今を生きる人たちへのメッセージが綴られています。

挙式からわずか数日後、海軍飛行士の夫は台湾へ配属され、「ラブレター」のやり取りが始まります。しかし、第二次世界大戦に突入すると、文面は愛に満ちた言葉から死を覚悟した内容へと変わっていき、やがて返信が途絶えます。開戦から1年余り、著者のもとに夫の遺書と戦死の通知が届きました。遺書に記された「しかるべく身を処せられよ」の言葉を胸に、小児科医になるという夢をかなえた著者は97歳になった今も現役で活躍しています。「自分たちが子どもを持てなかった分、世界の子どもを幸せにしたい」と。

「ひょうご・ヒューマンフェスティバル 2013 in たんば」を盛大に開催



オープニングセレモニーであいさつする金澤和夫副知事（中央）。はばタンらマスコットキャラクターも登場しました



立木さん（右端）は地元の高校生たちにチャレンジすることの大切さを伝えました

8月3日、「人権文化をすすめる県民運動」の推進強調月間（8月）の主要行事である「ひょうご・ヒューマンフェスティバル2013 in たんば」を丹波市の丹波の森公苑と柏原住民センターで開催しました。

市立柏原中学校吹奏楽部のウェルカム演奏の後、ひょうご人権大使の伊東浩司さんのビデオメッセージによる開会宣言で幕開け。人権講演会には書家の金澤翔子さん、泰子さん親子が登場。「ダウン症の娘とともに生きて」を演題に、障害を受け入れて活動されている様子を語り、パフォーマンス「まごころの書」も披露されました。午後のステージは、「全盲のチャレンジャー」立木早絵さんによる高校生とのトークライブや弾き語りで盛り上がりました。そのほかにも、太鼓の演奏や人形劇、人権サッカー教室、子ども多文化共生教育フォーラムなどバラエティーに富んだプログラムで、満席の会場は大人も子どももたくさんの笑顔に包まれました。

イベントガイド

心のふれあう町民の集い	●日時／9月8日（日）13:30～15:15 ※無料、申し込み不要 ●場所／香美町小代区総合センター大集会室 ※JR「八鹿」駅から全但バス「小代地域局」下車、徒歩約5分 ●内容／講演「インターネット社会が与える影響を考える」三好成明さん（ひょうごインターネット安全利用推進機構） ●問い合わせ／香美町人権推進室 TEL0796(36)1110
うたごえ喫茶	●日時／9月21日（土）14:00～16:45 ※無料、申し込み不要 ●場所／淡路市立北淡公民館 ※淡路交通バス「北淡IC」または「岩屋」から「富島」下車、徒歩約3分 ●内容／第1部「金子みずゞの心を歌う清水正美コンサート」出演：オペレッタ劇団としび（清水正美さんほか） 第2部「うたごえ喫茶」出演：地元グループ ●問い合わせ／淡路市人権推進課 TEL0799(64)2521

ハーフタイム

わが家は4世代で同居しています。毎日がにぎやかですが、介護にまつわる話は決して他人事ではなく、その難しさを痛感しているところです。さまざまなサポートを受けながら、家族のつながりを大切に時間を過ごしていきたいと思っています。今月号の取材先で出会ったお年寄りの方々の元気な様子に驚きました。やりがいや生きがいを感じながら活動する姿は輝いていました。間もなく4人に1人が65歳以上という社会がやって来ます。世代を超えて支え合い、まちづくりに参加していきたいと思っています。（小池）